



TITLE:

式辞

AUTHOR(S):

菊池, 光造

---

CITATION:

菊池, 光造. 式辞. 静脩 2000, 36(3): 5-7

ISSUE DATE:

2000-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37551>

RIGHT:

# 式 辞

京都大学附属図書館長 菊池 光 造

本日は皆様ご多忙のところ、文部省からは学術国際局、太田慎一学術情報課長のご臨席をいただき、また国立大学図書館協会会長であります東京大学落合卓四郎図書館長をはじめ諸大学の図書館長、本学からは、長尾総長をはじめ両副学長、諸部局長の先生方、さらには多くの関係者のご出席を得まして、ここに京都大学図書館創立百周年記念の式典を開くことができますことは、私どもの大きな喜びでございます。ここに厚く御礼を申し上げます。この機会に、附属図書館を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。

京都大学の図書館事務は明治30年の本学創立とともに理工科大学教室の一部に借り図書館室が設けられたことに始まるわけです。この年6月18日、勅令第209号によって本学が創立されると同時に、東京および京都の両帝国大学の官制も定められ、大学図書館および図書館長の名称もはじめて明記されました。しかし、京都大学図書館と致しましては閲覧業務が開始された明治32<1899>年12月11日をもって創立の日としています。

いま創設期の附属図書館を振り返って注目されますことは、京都大学初代総長木下広次（ひろじ）の事跡であります。彼は東京帝国大学の教授時代に「図書管理」（現在の図書館長）を兼務して、図書館について深い理解を持っておりました。まず木下総長は、新設の京都大学図書館のために、全国の識者、諸機関に、総長名で図書・資料・標本などの寄贈を訴え、これに応えた有志のお力によって短期間に実に膨大な量の貴重な図書・資料が収集されたのであります。ちなみに申しますと、かの漱石夏目金之助も、この依頼にこたえて出版社に寄贈協力方を申し送ったことが漱石日記の中に記されております。

一方、木下総長は、附属図書館創立の当初から、本学関係者だけではなく、広く一般市民に

も閲覧の便宜を与えることを考えていました。いわば、すでに現時点に通ずる「開かれた図書館」の構想を持っていたのであります。また、きわめて先駆的に、学生の書庫内検索をも許す体制をとりました。

京都大学附属図書館が今日あるのは、百年前、その出発の時点で木下総長がとられた図書館行政の賜物であるといえます。

いま、その後の図書館の歩みを振り返りますと、多くの注目すべき動きがありました。一例をあげれば、吉田松陰の遺言にしたがって造られた「尊攘堂」の「維新特別資料文庫」が明治33年に「尊攘堂保存会」から京都大学図書館に寄贈され、明治36年には学内で竣工した尊攘堂で、この文庫の一般展示会が開かれました。これが、その後今日まで続く本図書館の公開展示会の濫觴であります。ちなみに申しますと、尊攘堂は今もこの図書館の西北隅にひっそりと立って時代の変遷と京都大学の行方を見守っているかのようであります。

言語学者新村 出教授は、明治44年から昭和11年まで、明治・大正・昭和の3代、実に25年の長きにわたって附属図書館長を務めました。彼の洋の東西に亙る文献についての広い見識により、本館の誇るべき特殊文庫の大半がこの時期に収集されました。いまこれらを列挙する暇はありませんが、歴史と日本文化の凝縮した京都の地を背景として、その後も現在にいたるまで営々として続けられてきた文献資料収集の成果は、本図書館を日本文化・古典研究のメッカにしたのであります。

図書館には本来研究図書館と学習図書館という二つの面があり、研究図書館機能は、しだいに



部局図書館・室に移行してきたわけですが、多くの貴重書・資料や大型コレクションを所蔵する附属図書館は学部学生諸君のための学習図書館であると同時に、人文系の研究図書館としての機能も持ちつつ発展してまいりました。また現在本図書館は工学系の外国雑誌センターとしても機能しているのであります。

学習図書館的機能をめぐることは、すでに昭和4年から教官の講義に連動する「指定図書制度」が実施されたこと、昭和8年からは法経第4教室の2階に第2閲覧室を開設して、自学自習の構想の一端を実現したことなどが注目されます。

本日は図書館の元職員の方々に多数ご出席いただいておりますが、戦時中の暗い谷間の時期、戦後の混乱期にも、京都大学附属図書館は歴代館長、その時々を担った職員たちの献身的な努力に支えられて、その機能を果たしてきました。この機会に私どもは、こうした先人たちのご努力にも感謝の念を捧げたいと思います。

ここで附属図書館の現状について申しますと、京都大学全体の図書館システムは60余に及ぶ部局図書館・室の総体であり、全体では蔵書数564万冊に及んでいますが、中央館としての附属図書館は、開架10万7千冊、蔵書約80万冊を数えます。また国宝「今昔物語—鈴鹿本」をはじめ、重要文化財級の貴重書、貴重なコレクション群があり、その殆どを、いまや電子図書館として画像公開しています。閲覧席は1100席を配していますが、利用者はこれを遥かに超えて年間75万人、開館日1日平均2500人で、試験期には約5000人を数えます。

百年前の創設当時は、館長以下11人で出発した組織は、現在館長、事務部長のもとに総務課、情報管理課、情報サービス課の3課10掛を配する体制で、専任職員33人、非常勤職員23人の力で業務運営を支えているわけです。

さて、本学図書館は、昭和60年の本格的電算化開始以来、2度のリプレースを経て、図書館の電子化を推進してきました。学術情報センターのNACSISカタログと密接な連携を持つ全学的な目録業務システムの基盤を整備し、インターネット時代に対応する図書館業務システムを目指して、平成9年度のリプレースでは京都大学図

書館がNACSISカタログ2の接続第1号館となり、これを全面的に利用するトータルな図書館システムを全国に先駆けて導入することにもなりました。また、学術情報の多様化に対応して図書館のマルチメディア化を図ってまいりました。

こうした活動の延長線上に、現総長長尾先生が図書館長を務められた時代に礎石を築いた京都大学電子図書館が開花したのであります。

昨平成10年3月に正式にオープンした電子図書館は、オンライン・アクセスカタログ＝OPACによる高度な図書館・資料検索機能を提供すると同時に、CD-ROMによるデータベース、オンラインデータベースや電子ジャーナルの学内配信、そして何よりも発信型図書館の内容として、先に触れた国宝・重要文化財級の資料や、明治維新資料データベース、さらには京都大学百年史や京都大学博士論文題名目録など多くのコンテンツをインターネット上で公開しています。入力データは先日100万件を超え、画像データベースの詳細画像も今年度中に14万枚に達する予定であり、幸い各方面から高い評価をいただいております。学外サイトからのアクセスは急増して、1ヶ月2万5000サイト80万ページに及び、海外からのアクセスも着実に増加しつつあります。

建物について触れますと、現在の建物は、昭和58（1983）年に竣工した第3代目のものでありまして、鉄筋コンクリート地上4階地下2階3層、総面積14011.25平方メートルで、そのうち地下の4706平方メートルが書庫面積となっております。しかし学習図書館として学生諸君に提供する閲覧席の増設は焦眉の急であり、書庫の収容能力も遠からず限界に達することが予測されます。いまわれわれは、新しい世紀の要請にこたえるべく建物の問題にも取り組むべき地点にきているといわねばなりません。

ところで、附属図書館はいま、この創立百周年を機会に、図書館の現状と課題を見定めるべく自己点検・評価に取り組み、これを踏まえて専門家による外部評価を実施していただくという作業を進めています。

確かに、まさに世紀の変わり目に百周年を迎

えた京都大学図書館は、厳しさを増す環境と挑戦すべき多くの課題に直面しているといわねばなりません。

うち続く行・財政改革のもと、きわめて限られた財源の中で、いかに従来型図書館と電子図書館とのバランスをとりつつ図書館機能を充実させてゆくか。この延長上には、国立大学の独立行政法人化に対して図書館が如何に対応すべきかという課題も浮上してくるやに思われます。

大学改革との関連では、一方でカリキュラム改革と連動しつつ、自主的な学習を期待される学生諸君に、どのようにして充実したサービスが行えるのか、また一方では大学院重点化によって増大する大学院生、社会人や留学生に、い

かにしてより高度なレファレンス・サービスが行えるかが問われています。さらに、膨大な書誌情報の「遡及入力」、学内および大学間の図書・資料相互利用と迅速なデリバリー、図書・資料の収集と保存図書館機能の追及、情報倫理の確立と著作権問題への対応、国際交流の推進など、直面する課題は枚挙にいとまないものであります。

いま、京都大学図書館は、全職員が自己啓発と能力開発に努めて、こうした課題に挑戦し、図書館機能の更なる活性化のために努力せねばなりません。なにとぞ各位におかれましても、今後とも京都大学附属図書館を温かく見守り、ご支援ご鞭撻をいただきますようお願いいたします。私の式辞とさせていただきます。

(きくち こうどう)

## 式 辞

文部省学術国際局学術情報課長 太 田 慎 一

京都大学附属図書館創立百周年に際しまして、心よりお祝い申し上げます。

あらためて申し上げるまでもなく、大学は知的資産を生産・蓄積し、かつ更新しています。生産・更新については、研究者の方々が日々携わっておられるところですが、蓄積している場が図書館といえることができるでしょう。

フローとストックという経済学の言葉でいえば日々の研究がフローであり、研究成果がストックということになると思います。



このような場で、はなはだ幼稚なことを申し上げますと、私が子供の頃、なぜ日照が最も強い夏至が6月にあるのに8月に気温が最も高くなり、冬至が12月にあるのに2月に気温が低くなるのかということでした。その後、微積分を勉強しますと、日照は気温の上がり具合すなわち微分なり差分を与えるものであるので、日照がコサインカーブとすると、気温はその積分であるサインカーブ、すなわち約4分の1年の遅れをもって気温の上昇カーブが描かれることが理解できたわけでありました。

ここで申し上げたいことは、例えば植物が成長するためには、日々の糧である日照も大事ではありますが、もう一つ重要な環境因子である気温も重要であることです。フローとストックはお互いに関連するものですが、これら両者が重要なのでありまして、日頃財政局と我々が折衝している場面でも、フローについては比較的良好に理解されるのですが、ストックの重要性はなかなか理解してもらえないことを痛感しております。